

# 図書館通信 —32—

1975.7

## 図書館の発展を祈って

上野実朗

昭和48年7月1日、名館長石塚経雄博士から附属図書館運営のバトンを受けとって以来、その重要性と困難性について痛感した毎日でありました。総合大学における集中方式の図書館、つまり同じキャンパスでは図書館を集中的に運営してゆくのは、ひとつの「生活のチエ」でありましょう。もしも各部署や学部が夫々の都合だけを考えて図書館について総合的な考え方をもちたないと附属図書館は成立しません。これに反して全学が少しづつでも協力して附属図書館に手を借して育ててゆけば立派に成長する訳です。総合大学はひとつの有機体であり、一人の人間にたとえれば頭とか右手とか右足だけが栄養満点でも健全な人間ではないように、学部も図書館もバランスをとって発展しなければならないと信じております。

次に図書館緊急の問題である増築と定員増についてのべます。開館当時に活用された教官個人閲覧室や会議室はもうありません。前者は書庫の代用、後者は整理係の事務室となっています。ひとつの独立した部局でありながら図書館の会議は本部の会議室などを借りています。いま事務室は三室に分散して仕事をしていますが極めて非能率的です。また蔵書は増加する一方です。25万冊をこえる貴重な出版物を活用できるように格納する場所が無いのです。これらの本は乏しい予算でやっと買えた血と涙の結晶です。その本さえ書架が買えず、または買って置く場所も無く、机上につみ上げられています。係員はこれ以上にふえたらダンボール箱につめて、どこかに積み上げる以外に方法があるのかと館長にききます。一部の人は廃棄について検討せよとのべ、別の人はマイクロ化をすすめます。廃棄処分については法令改正が、機械化してマイクロリーダーを用いるには莫大な予算その他が必要となります。また文科系と理科系では附属図書館に対する考え方がことなります。実験を主とする自然科学部門では新刊書が活用され、古い本は不用不急となります。しかし科学史の立場からは必要で、誰かが何時どこかで読みたくなるかも知れません。

こんな悠長な仮定の問題を待つことはできない。つまり現在の自分の立場だけを強く主張してゆくと結局、集中方式の附属図書館は不必要となり、各学部・各教室の図書室を強化して、不用不急の古本だけが図書館でねむることになります。本館と分館・図書室との関係はこれからの重要な宿題となります。

書庫面積の不足と同様に事務室も狭いのです。本館だけでも28人の職員が総務・整理・運用・参考・調査に分れて仕事をしています。図書は発注・購入・受入・登録・配架・借出・返納・整理などと色々に動きます。そのうえ、一冊の本が水平に同じ階を車にのって移動する方式は多くの図書館で実施しています。しかし静大では2階・3階・4階・3階と上下して右往左往し、重い本を持ち歩いています。これを同じ階にしたいのが悲願のひとつです。しかし現在、ほとんど日は当らない北向きで、狭く通風は悪く、病人続出です。増築して同じ階の南向きを利用するのが悲願のふたつです。

次に定員増について述べます。学生・学科目・学科・大学院の増は蔵書・サービスの増加とともに職員の負担となって来ます。この際、業務内容を整理し、時間・人員・予算などと見合ったスケジュールをたてなければなりません。しかしそれらを検討しても定員増を要求せざるを得ない実情であります。

以上は図書館の発展をするためには必要最小限の希望であります。さて私が館長就任にあたり本誌21号(1973.9)に書いた理想は果してどうなったか。省みるとまことにはずかしい限りであります。しかし幸に全学の皆様と図書館職員諸氏のお陰で大過なく2年間の任期を果たせたことを心から感謝して、図書館の発展を祈り退任のことばとし、次の優れた中沢館長にバトンを渡します。(1975.6.30)

## 私のすすめたい本・28

## アメリカ・インディアンをめぐる

上田 伝明

今日、世界に君臨するアメリカ合衆国において、アメリカ民族の形成過程から取り残されてきた例外のもっとも大きなものはアメリカ黒人と並んでアメリカ・インディアン（もっとも、ヨーロッパ人の「到着」以前2万年をこえる過去からの原住民であるかれらはネイティヴ・アメリカン、もしくはファースト・アメリカンというべきである）であるといつてよい。かれらは、かつて、アメリカ大陸の主人公であり、それぞれ部族（300部族を超えた）を構成し、一体となって主体性、独立性をもって生活していた。それがこれまで、連邦政府の、とくに南北戦争以降の「根絶」政策を経て殆ど現実の社会問題たりえない状態にまで追い込まれてきていたのであるが、この数年、「レッド・パワー」なる言葉もいわれるように、復権を求めての運動が伝えられている。そして、遠く海を隔てたわが国においても、最近、インディアン関係の書物が多く出版されてきている。かかるインディアンをめぐる問題は、国家、基本的人権、少数集団の基本権といった重要問題を内包していることは言うを待たない。

ところで、アメリカ・インディアンは、小は数百人から大は数万人で構成される部族（なかには部族連盟の組織されたものもあったが）でもってそれぞれの生活を営んでいたのであるが、合衆国は当初かれらを国家に準じて扱い、問題の解決にあたっては、部族とのあいだに条約を締結するという方法をとったのである（ちなみに、その殆どは合衆国への土地譲渡を規定するものであって、その数は389の多きを数えた）。しかし、南北戦争に際し、チェロキ族など黒人奴隷制度をとっていた有力な部族は南部連合に参加し、最後まで合衆国に抵抗するのであるが、南部側の敗北の結果、苛酷な制裁がインディアンに加えられることになる。つまり、戦後、南部地域の土地改革を行うことをしなかった連邦政府は、南部の民主化・近代化という困難な努力よりも、諸矛盾の「西部開拓線への放出」――たとえば購買力をもつ自営農民の育成、そのためのインディアンの土地の収奪を行うことになったのである。連邦議会は、1871年、以後インディアン部族を独立のネイション・

部族・権力とは認めず、条約を締結しないという連邦法を制定したのである。これから後、一連の連邦法（1887年ドーズ法、1898年カーティス法等）によって、インディアン部族の土地の収奪、インディアンならびに白人各個人への土地割当（インディアンの合衆国市民化）が強力に遂進され、同時に部族の主体性、独立性が崩壊せしめられたのである。しかし、このプロセスの中で、主要な部族にあった黒人奴隷制度、大土地所有制度（チェロキ族等五部族）、身分制度（カイオワ族等）といった反民主的な制度も打倒されるという結果ももたらされている。要するに、インディアン問題は、「合衆国政府・白人対インディアン」という「人種」もしくは「人種の偏見」を中心とした図式ではなく、それぞれさまざまな階級関係を内包する合衆国およびインディアン部族の対応関係の中から、究極的には「合衆国権力対インディアン部族」という図式を中心にして問題を把握しなければならないのではないかということなのである。

さて、アメリカ・インディアンに関する本であるが、日本語で書かれたものとしては、部族の酋長等の回顧録といったものは別にして、余り多くはない。現代のインディアン運動にウエイトをおいた清水知久「アメリカ・インディアン」（中公新書）、一部扱っているものとして本田創造「アメリカ社会と黒人」（大月書店）、\*本多勝一「アメリカ合衆国」（朝日新聞社）、そして合衆国権力と部族の対応関係でとらえた\*上田伝明「インディアン憲法崩壊史研究」（日本評論社）が参考となろう。英文のものは無数にあり選択に困るが（どんな小部族でもまとまった研究書があるといつてよい）、主だったものとして以下書名だけを挙げておきたい。 Brophy & Aberle, *The Indian - America's Unfinished Business*, Univeresity of Oklahoma Press; Forbes, *The Indian in America's Past*, Prentice - Hall; Underhill, *Red Man's America*, University of Chicago Press; Wissler, *Indians of the United States*, Doubleday & Co; Abel, *The American Indian as Slaveholder and Secessionist*, The Arthur H. Clark Co.; Debo, *The Road to Disappearance*, University of Oklahoma Press; Foreman, *The Last Trek of the Indians*, University of

（5ページへつづく）

## オクスフォードの図書館

### 山内一芳

オクスフォードは、静岡と同じように、起伏の少ない町で、多くの学生たちは、自転車にのって、大学にやってくる。自転車といっても、みな、中古ばかりで、日本では、燃えないゴミの中にまぎれこんでいそうなものにもちゃんとチェン・ロックがしてある。イギリスの合理精神・儉約精神のあらわれというより、イギリスの学生の質素な生活のあらわれというべきであろうか。私も、オクスフォードの学生の仲間入りというわけで、13ポンドで、中古の自転車を手に入れたのであるが、スタンドもなければ（イギリスの自転車にはスタンドがない！）、チェーンも丸だし、ズボンは、油だらけになること請け合いといったなんとも仕末のわるい代物であった。毎朝、この愛すべき自転車にのり、町の中心にむかって、St. Gilesの手前を左に折れ、University Parkにそって走り、South Parksを抜けて、英文科のあるSt. Cross Buildingにやってくる。そして、講義がおわると、Faculty Libraryで本を借り、しばらく、そこで、時を過してから、Hollywell Streetに出て、Broad Streetにむかう。ここには、Bodleian Library, Blackwell（オクスフォードの代表的な本屋）、それに、なじみの古本屋、Thornton & Sonが、集まっているからである。ざっと、この二軒の本屋に目を通すと、例の愛車（？）をSheldonian Theatreの前において、Bodleian Library（Old Library）のUpper Reading Roomに行き、夕方まで、ここで、過す。これが、オクスフォードでの私の日課であった。

Bodleian Libraryは、ご存知のように、ヨーロッパでも、最も古い図書館の一つで、イギリスでは、British Museumについて、第二の図書館である。入口正面には、展示室があり、その両わきには、愛嬌のいい守衛さんがひかえていて、いつもユーモアたっぷりに声をかけてくれる。むかって左側にいる守衛さんのわきを通って、二階に上ると、カタログ室がある。カタログは二段ずつ、四列にならんでいて、1920年を境いに、著者別に排列されている。カタログは、背の皮が、ボロボロになっていて、ズシリと重い。直接、書きこまれたもの、謄写版で印刷されたもの、活版のものとその書体もさまざま、貼りつけられた

紙も、色あせて、もろくなってしまっているものもあって、長い間、使用に耐えてきたその歴史を物語っている。

本を借りるには、まず、グリーンのカードに、カタログで調べた請求記号、著者名、書名、発行された年、そして、自分の名前と利用する図書室（私の場合は、Upper Reading Roomであるから、Uと書きこむ）を書いて、librarianに出すと、約2時間で、自分のいる図書室のカウンターに届けてくれる。そこで、名前をいうと本を受けとることができるわけである。もちろん、Upper Reading Roomにも、英文学関係の図書が用意されているから、この場合には、黄色いカードに、所定事項を書き込んで、本とひきかえに、そのカードを書棚においておく。返すときは直接、もとの棚に返し、カードは自分で処分すればよい。

書庫から借りた本は、二週間ほど、カウンターで預っていてくれるので、ひき続き読みたい場合は、カウンターに、その旨を申しでておけばよいのである。ゼロックス・コピーのサービスも、カウンターでやってくれる。料金は、1枚3.5ペンス（約25円）、手続きは、ここでとるが、支払いは、入口の守衛さんのところに行かなければならない。二日ほどでできあがるが、このコピーサービス、日本ほど、簡単にはいかない。申し込み用紙に、論文のタイトル、著者など書きこんだ後、次のような宣誓文に、必ずサインをしなければならぬ。「1.研究の目的のために、この複写をお願いします。この目的以外には、使用致しません。2. この複写は、これまで、図書館員から受け取ったことはありません。」というものである。つい先日の新聞に、コピーによって著作権が侵害されているので、複写を制限する法律が検討されるという記事が載っていたが、Bodleian Libraryでは、著作権の規定を実にきびしく適用している。著者の死後50年を経ている本は、絶対に、許可してもらえない。もし、50年経っているかどうかわからないときには、そのために用意された人名辞典と、最終の著作期日を調べて、結論を出すことになっている。私は、アメリカの言語学者W. P. Lehmannの手紙をもって、彼の本の複写をたのんだことがあった。しかし、librarianは、許可せず、指示の通りに、文面をもう一度書きなおしてもらって、やっと許可してもらったというなんともわずらわしい経験をしたことがある。頭のかたいlibrarianだとあきれるが、考えて（6ページへつづく）

## 利用統計

—昭和49年度— (本館)

表1. 利用者別統計

区 分	率対対象数 (人)	入館者数 (人)	閲 覧					貸 出		文 献 複 写		相互貸借 (冊)
			出納(冊)	指定(冊)	開架(冊)	出納(冊)	合計(冊)	館内(件)	館外(件)			
学 部	人 文	324 (7.1%)	5,602 (9.2%)	1,230 (24.5%)	172 (4.6%)	664 (11.5%)	283 (23.3%)	1,119 (10.4%)	467 (17.5%)	64 (38.8%)	4 (30.8%)	
	教 育	849 (18.5%)	12,028 (19.8%)	2,090 (41.6%)	630 (16.7%)	1,583 (27.3%)	470 (38.8%)	2,683 (25.0%)	936 (35.1%)	80 (48.2%)	6 (46.1%)	
	理	268 (5.8%)	3,550 (5.8%)	143 (2.8%)	383 (10.2%)	565 (9.8%)	46 (3.8%)	994 (9.2%)	83 (3.1%)	0 (0.0%)	0	
	農	254 (5.5%)	752 (1.2%)	64 (1.3%)	46 (1.2%)	70 (1.2%)	0 (0.0%)	116 (1.1%)	63 (2.4%)	1 (0.6%)	0	
	教 養 部	人 文	417 (9.1%)	7,642 (12.6%)	473 (9.4%)	389 (10.3%)	580 (10.0%)	92 (7.6%)	1,061 (9.9%)	363 (13.6%)	0 (0.0%)	2 (15.4%)
		教 育	918 (19.7%)	12,867 (21.2%)	404 (8.1%)	616 (16.4%)	912 (15.8%)	173 (14.3%)	1,701 (15.8%)	328 (12.3%)	4 (2.4%)	1 (7.7%)
		理	287 (6.3%)	4,708 (7.7%)	82 (1.6%)	402 (10.7%)	484 (8.4%)	40 (3.3%)	926 (8.6%)	94 (3.5%)	0 (0.0%)	0
		農	307 (7.0%)	3,249 (5.3%)	88 (1.8%)	168 (4.5%)	251 (4.3%)	4 (0.3%)	423 (3.9%)	124 (4.7%)	0 (0.0%)	0
		工	897 (19.6%)	9,510 (15.6%)	165 (3.3%)	934 (24.8%)	594 (10.3%)	17 (1.4%)	1,545 (14.3%)	160 (6.0%)	0 (0.0%)	0
	大 学 院 生 等	65 (1.4%)	864 (1.6%)	279 (5.6%)	24 (0.6%)	82 (1.4%)	87 (7.2%)	193 (1.8%)	48 (1.8%)	16 (10.0%)	0	
	小 計	4,586 (100%)	60,772 (100%)	5,018 (100%)	3,764 (100%)	5,785 (100%)	1,212 (100%)	10,761 (100%)	2,666 (100%)	165 (100%)	13 (100%)	
	教 職 員	教 官		1,082			154	5,213	5,367	701	636	26
職 員			22			125	376	501	93	142	15	
研 究 室							3,023	3,023				
小 計			1,104			279	8,612	8,891	794	778	41	
学 外 者		393	244					182				
合 計		62,269	5,262	3,764	6,064	9,824	19,652	3,642	943	54		

表2. 分類別統計

区 分	閲 覧					貸 出			
	指 定	参 考	開 架	出 納	合計(冊)	指 定	開 架	出 納	合計(冊)
0 (総記)	75 (0.4%)	1,543 (12.2%)	632 (2.6%)	143 (2.7%)	2,393 (3.9%)	24 (0.6%)	179 (3.0%)	243 (2.5%)	446 (2.3%)
1 (哲学)	779 (4.1%)	437 (3.5%)	1,414 (5.9%)	155 (2.9%)	2,785 (4.6%)	109 (2.9%)	436 (7.2%)	715 (7.3%)	1,260 (6.4%)
2 (歴史)	1,261 (6.6%)	1,271 (10.0%)	2,493 (10.4%)	313 (5.9%)	5,338 (8.7%)	343 (9.1%)	652 (10.8%)	607 (6.2%)	1,602 (8.2%)
3 (社会)	2,045 (10.8%)	1,244 (9.8%)	5,083 (21.2%)	1,000 (19.0%)	9,372 (15.4%)	550 (14.6%)	1,384 (22.8%)	2,128 (21.6%)	4,062 (20.7%)
4 (自然)	10,846 (57.1%)	3,097 (24.4%)	6,683 (27.8%)	150 (2.9%)	20,776 (34.1%)	1,986 (52.8%)	1,594 (26.3%)	2,080 (21.2%)	5,660 (28.8%)
5 (工学)	976 (5.1%)	165 (1.3%)	463 (1.9%)	41 (0.8%)	1,645 (2.7%)	218 (5.8%)	188 (3.1%)	442 (4.5%)	848 (4.3%)
6 (産業)	102 (0.5%)	162 (1.3%)	359 (1.5%)	99 (1.9%)	722 (1.2%)	30 (0.8%)	66 (1.1%)	724 (7.4%)	820 (4.2%)
7 (芸術)	401 (2.1%)	310 (2.4%)	1,348 (5.6%)	58 (1.1%)	2,117 (3.5%)	49 (1.3%)	198 (3.3%)	442 (4.5%)	689 (3.5%)
8 (語学)	432 (2.3%)	3,759 (29.7%)	639 (2.7%)	144 (2.7%)	4,974 (8.2%)	128 (3.4%)	138 (2.2%)	559 (5.7%)	825 (4.2%)
9 (文学)	2,092 (11.0%)	678 (5.4%)	4,903 (20.4%)	424 (8.1%)	8,097 (13.2%)	327 (8.7%)	1,229 (20.2%)	1,682 (17.1%)	3,238 (16.4%)
雑 誌				2,735 (52.0%)	2,735 (4.5%)			202 (2.0%)	202 (1.0%)
合 計	19,009 (100%)	12,666 (100%)	24,017 (100%)	5,262 (100%)	60,954 (100%)	3,764 (100%)	6,064 (100%)	9,824 (100%)	19,652 (100%)

コメント — 学生の利用について —

1. 利用者別統計 (表1)

1) 入館者数 は学部、教養部とも総体的には奉仕対象学生数比にみ合ったもの(学部 38.3% : 37.6%、教養部 61.7% : 62.4%)となっているが、個別的にみると、農学部(シニア)については、5.5% : 1.2%と入館率が低くなっている。

2) 閲覧冊数(出納)では、学部75.8%、教養部24.2%で、書庫内専門書の利用率は、学部学生(人文、教育系)の利用率が高い。

3) 貸出冊数

学部対教養部では①指定図書 33.3% : 66.7% ②開架図書 51.2% : 48.8% ③出納図書 73.1% : 26.9%で、①-③の平均は 47.5% : 52.5%である。

以上の数値から教養部では指定図書の利用率が高く、開架、出納(書庫)図書となるに従って学部の利用率が高くなっているが、平均すると、学部と教養部の利用冊数は相半ばしている。

また、学部別に詳しくみると、シニア、ジュニアコースとも農学部の利用率が、低くなっている。これは農学部に限らず学生からも指摘されたように研究室等の備付によって書庫内専門書の量が少ないこと等に由来すると考えられるが、学生用図書の受入冊数のバランス、実験・非実験の差、学部のキャンパス内の地理的位置等の問題も含んでいるので、今後、研究室と図書館が、大学の教育と研究に対し、資料の面でどのように機能してゆくべきかの問題を提起している。

2. 分類別統計 (日本十進分類法)(表2)

1) 閲 覧

指定・開架図書のうち自然科学部門の利用率が1位を占め、参考図書では語学、出納図書では雑誌がそれぞれ1位を占めている。平均値では、自然34.1%、社会15.4%、文学13.2%の順となり、自然科学部門の利用率が別表(太字部分が利用率1位を示す)のとおり高い。

2) 貸 出

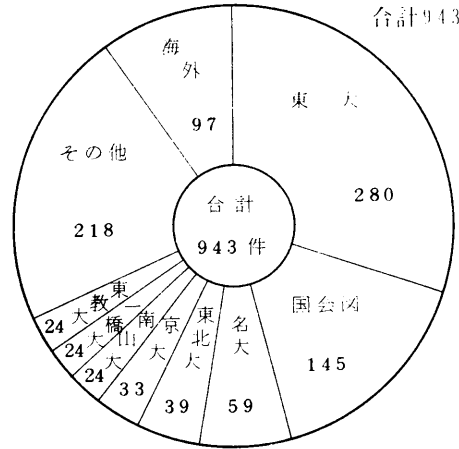
指定・開架図書は前記閲覧と同じ傾向を示し、平均値では自然科学28.8%、社会20.7%、文学16.4%の順である。

また、配架冊数に対する利用率では参考、

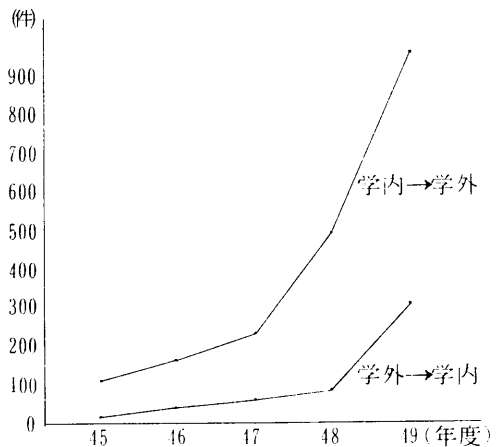
指定、開架の順位となっている。

その他文献複写、相互貸借、参考調査については、特に説明の必要はないと思われるので省略した。(運用係長 吉田記)

館外文献複写依頼先 (昭和49年度) — 本館 合計943件



文献複写依頼・受案件数の推移 — 本館 —



学生貸出冊数の推移 — 本館 —

年度	学生数	貸出冊数	開架	指定	閉架
45	4,073	10,028	4,918	4,196	884
46	4,029	9,997	4,618	3,620	1,759
47	4,126	7,080	3,840	2,336	1,000
48	4,668	6,929	3,779	2,358	792
49	4,586	10,761	5,785	3,761	1,212

(3ページよりつづく)

Chicago Press; Chapman, *The Otoes and Missourias - A Study of Indian Removal and the Legal Aftermath*, Times Journal Publishing Co. (教養部)

